

「は」と「が」の 用法理解の実態 と構文別指導の 効果

Understanding of Wa and Ga Particle Usage and Sentence Structure-Based Instruction

松澤隆志
浙江師範大学

Takashi Matsuzawa
Zhejiang Normal University

Reference Data:

Matsuzawa, T. (2015). 「は」と「が」の用法理解の実態と構文別指導の効果 [Understanding of *wa* and *ga* particle usage and sentence structure-based instruction]. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *JALT2014 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

「は」と「が」の用法に関しては理論的研究が多数発表されているが、日本語学習者への実践的な指導法に関しては統一された見解が無いのが現状である。本研究では、ビジネスで日本語を使用している中国人が、「は」と「が」の用法に関してどのような課題を持っているのか、18の用法に分類して調査した。また、明示的な指導として孟（2004）の提唱する、構文（単文、重文、複文、はが文、転移判断文）ごとに分けて指導する方法を採用し、効果を測定した。被験者は152名である。結果は、対象の中国人日本語話者の場合、転移判断文と重文において特に誤用が多いことが判明した。指導の効果に関しては、指導前の正答率が68.49%であったものが指導後は78.93%と有意に向上し、効果は1か月後も継続した。特に誤用の多かった転移判断文と重文に関しては顕著な正答率の向上がみられた。一方で単文においては指導法の改善が必要と判断された。

Many theoretical discussions on the difference between *wa* and *ga* have been conducted in the field of Japanese linguistics. However, practical methods of teaching this content to Japanese learners have yet to be developed and published. Reporting on a study targeting 152 Chinese JFL users in business contexts, this paper offers an error analysis on the use of *wa* and *ga* from 18 different typical usages. It also questions whether the type of instruction based on a sentence structure analysis (Mou, 2004) is effective or not. Results indicate that the JFL users in this study had problems using *wa* and *ga* correctly in sentences with particular structures. The research suggests that this method was effective. The correct answer ratio prior to instruction was 68.49%; this improved to 78.93% after instruction and the effectiveness continued to be observed 1 month later.

取り立て助詞「は」と格助詞「が」の機能や用法の差異に関しては言語学的な研究が進んでおり、また、学習者が起こす誤用の分析は多数発表されているが、教授法を実践してその効果を論じた研究は少ない。当研究では、ビジネスで日本語を使用している中国人が、「は」と「が」の用法に関してどのような課題を持っているのかについて、「は」と「が」の用法を5つの構文、18の用法に分類し、それをもとに穴埋め問題を作成し、正答率を調査した。また、明示的な指導として孟（2004）の提唱する、構文ごとに分けて指導する方法を採用した。更に、単文における「は」と「が」の使い方に関しては、例文を提示する方法と、文法を解説する方法を、別々の被験者グループに実施し、両者の理解度の差も調査した。



JALT2014 CONFERENCE PROCEEDINGS

先行研究

助詞「は」と「が」に関しての日本語教育関連の研究については、教授法の提言をしたもの、誤用を分析したもの、教授法を実践しその結果を考察したものがある。

教授法に関しては、今村(2002)は、「は」と「が」の違いについて、情報の新旧、文のタイプ、係り性、同類の名詞との関連、の4項目に分類して解説し、授業への提案をしている。特に複文の従属節内の「が」についてはひとつの規則として教えるべきとしている。徐(2005)は、日本語と中国語の主格・主題の扱いを比較して、中国語での主題の扱いを学習者に認識させた上で日本語の主格・主題の提示をするという提案をしている。

誤用の分析に関する論文は多い。表1は、誤用の分析から得た「は」と「が」の用法の修得の難易度に関し、市川(1989)、坂本(1998)、謝・金城(2005)、焦(2011)、田村(1994)、俵山(2007)、花田(1998)、孟(2004)の報告をまとめたものである。

表1. 先行研究における用法の難易度

難易度	用法	出典
	複文・従属節での「が」	市川(1989)、坂本(1998)、焦(2011)、俵山(2007)、花田(1998)
	総記(排他)の「が」	坂本(1998)、焦(2011)、田村(1994)、花田(1998)
難しい	中立叙述(現象文)の「が」	謝・金城(2005)
	転移した判断文の「が」(中国)	孟(2004)
	主題の「は」	田村(1994)
	対照(対比)の「は」	坂本(1998)、謝・金城(2005)、花田(1998)
	重文(中国)	孟(2004)
	主題の「は」	坂本(1998)
	「は」(「が」に比べて)	坂本(1998)
易しい	可能・感覚・所有(状態述語)の「が」	坂本(1998)、花田(1998)
	はが文	坂本(1998)、孟(2004)
	判断文の「は」(中国)	孟(2004)
	疑問詞疑問文	田村(1994)

注. 坂本(1998)は先行研究のまとめである。また、坂本の「部分の『が』」は、例文から、当論文では「はが文」に含めた。

上記、「は」と「が」の誤用を分析した論文では、分析を踏まえて指導法を実践し、その効果を把握したものは無かった。

指導法を実践して効果を把握した論文には市川・本間(1990)がある。漫画やイラスト等、ビジュアルに「は」を指導するもので、学生の反応は報告されているが、定量的な効果の把握については言及されていない。

総括すると、「は」と「が」の指導法に関してはまだまだ実践での効果に関する情報が不足しており、研究の余地が大であると考えられる。

本研究の目的と枠組み

研究調査事項

本研究は、日本語で仕事をしている中国人ビジネス従事者において、

1. 助詞「は」と「が」に関して、現状、どの用法に課題があるのか、
2. 孟(2004)の提唱する、構文別の明示的な指導は効果があるか、
3. 単文の指導では、例文を提示する方法と文法を解説する方法に指導効果の差があるか、

を調査することを目的とする。

研究調査方法

調査対象

本研究は、著者が勤務していた会社(中国、深圳)の日本語研修「日本語復習コース」の1モジュール、「は」と「が」として研修を兼ねて実施した。後述するが、単文での指導においては例文を提示するコース(以降、例文コース)と文法を解説するコース(以降、解説コース)の異なる2種のコースを用意し、10か月間に、例文コースは7回、解説コースは6回、計13回実施した。両コースとも単文以外のコース内容は同じである。対象は、日本語で仕事をしている中国人ビジネス従事者(以下、中国人ビジネス日本語話者という)である。

参加者(被験者)は152名(女性110名、男性42名)、平均日本語学習歴は4.19年である。年齢は20歳代が130名、30歳代が22名で、うち、117名(76.97%)が日本語能力試験1級(N1級を含む)に合格している。業務における日本語の使用は、日本語を「読む」が140名(92.11%)、「書く」が145名(95.39%)、「聞く」が128名(84.21%)、「話す」が114名(75.00%)である(重複あり)。

研究調査データ収集方法

本研究においては孟 (2004) の主張する、構文ごとに明示的な指導を行う方法を採用した。まず構文として、孟 (2004) を参考にして、単文 (主語・主題と述部がひとつだけの文)、重文 (対等な格の節がふたつ並立してできている文)、複文 (ふたつの節からなる文。並立節でできたものと、主節と従属節でできたもの)、特殊な文 (はが文と、転移した判断文、後述) を採用した。

単文での「は」の用法 (機能) として、主題を提供する、判断を表す、対比する、「を」の代わりに目的格を取る (例: 家賃は払いました) を採用した。「が」の用法として、現象を表す、他を排除する、可能・感覚・所有の表現で「を」の代わりにする (状態述語の目的語、坂本、1998) (例: ピアノが弾けます) を採用した。「が」の用法として「強調する」を別に扱う考えもあるが、「他を排除する」機能の一部として扱うことにした。これらの用法の選択には坂本 (1998)、村田 (2007)、孟 (2004) を参考にした。

重文では、対比と並立を扱うこととし、たとえば対比の場合は「～は～だが、～は～だ」の構文を、並立の場合は「～が～で、～が～だ」の構文を正しい用法として示すことにした。

複文においては、「が」が使われる従属性の強い従属節 (連用節、連体節、名詞節)、「が、は」のどちらも使われる可能性がある弱い従属節 (引用節) と並立節の区分を採用し (村田、2007)、用法を検討することにした。なお孟 (2004) では複文の理由節を独立して扱っているが、用法によって強い従属節になったり、弱い従属節になったりするので判断が難しいと考え、孟 (2004) の言う理由節の例文は強い従属節の中に入れていた。

特殊な文では、はが文 (「～は～が～」文。例: 東京は人が多い) と転移した判断文 (「AはBだ」に対する「BがAなのだ」。例: 眠ることが赤ちゃんの仕事だ。以降、転移判断文) (孟、2004) を採用した。

理解度の把握のため、「は」と「が」二者択一の問題を各用法につき2問作成した。構成は以下のとおりである。

- 単文では、「は」に関して4つの用法で8問、「が」に関して3つの用法で6問
- 重文に関して2つの用法で2問
- 複文に関しては、並立文と弱い従属節は「は」と「が」をとる用法があり、それら4つの用法に関して8問、それに強い従属節で3つの用法で6問、計14問
- はが文では1つの用法で2問

- 転移判断文では1つの用法で2問

計36問を無作為に並べてひとつの問題セットとして3セット作製した (問題A、B、Cと呼ぶ)。これを、指導前の現状把握 (プリテスト)、指導後の効果の把握 (ポストテスト)、指導効果の持続性の把握 (1か月後テスト=事後テスト) に使用した。問題文は筆者が作成した (問題文例を付録に提示)。用法の例文とサマリーを表2に示す。

表2. 当研究における「は」と「が」の用法

構文	番号	用法 (注)	問題数	例文
単文	1	主題の「は」	2	学生時代、私は家から通っていた。
	2	判断の「は」	2	犬は動物である。
	3	対比の「は」	2	「高橋さんですか。」「私は小林です。」
	4	目的格をとる「は」	2	学費は払いました。
	5	現象の「が」	2	電車が来た。
	6	排他的「が」	2	君が今度のプロジェクトリーダーだ。
	7	可能・感覚・所有の「が」	2	ピアノが弾けます。
重文	8	対比	2	食べるのは好きですが、作るのは嫌いです。
	9	並立	2	兄が20歳で、弟が17歳です。
	10	弱・並立節の「は」	2	明日は休日だが僕は仕事だ。
	11	弱・並立節の「が」	2	バラが咲きましたがあまりにおいしませぬ。
複文	12	強・連用節の「が」	2	塀が倒れて、けが人が出た。
	13	強・連体節の「が」	2	私が作った料理と一緒に食べましょう。
	14	強・名詞節の「が」	2	今年、地震があったのはチリです。
	15	弱・引用節の「は」	2	結婚は早いほうがいいと父が言う。
	16	弱・引用節の「が」	2	あの元気な鈴木さんが病氣だと聞きました。
特殊	17	はが文の「は、が」	2	きりんは首が長い。
	18	転移判断文の「が」	2	眠ることが赤ちゃんの仕事です。

注. 用法の前の「強」は強い従属節を、「弱」は弱い従属節を示す。

効果の把握テスト

企業の研修の一環として実施したため、被験者に統制グループはおかず、カウンターバランス方式を採用した。つまり、①講義の前にプリテストを実施する。参加者をふたつのグループに無作為に分け、1のグループは問題A、2のグループは問題Bを解き、②講義終了後、ポストテストとして1のグループは問題Bを、2のグループは問題Aを解く。保持テストは1か月後（実際には被験者の便宜をはかって31日後から40日後までの間）に問題Cを用いて実施する。問題A、B、Cはプリテストの得点分布の比較により、難易度に差がないことを事後確認している。問題A、B、Cはコースごとに順繰りに入れ換えて使用した。

講義

明示的な指導として日本語で講義と演習を行った。内容は次のステップで実施した。

1. 単文、重文、複文の説明と演習
2. 単文における「は」と「が」：
 - ✓ 例文コースは「は」と「が」それぞれの用法を、例文を提示して解説し、演習を行う。
 - ✓ 解説コースは、「は」と「が」それぞれの機能、用法を文法で解説し、演習を行う。
3. 重文における「は」と「が」に関して、情報が対比の場合と並立の場合について解説し、演習を行う。
4. 複文における「は」と「が」について、並立節、強い従属節（連用節、体節、名詞節）、弱い従属節（引用節）の順で解説し、演習を行う。
5. 特殊な文として、はが文、転移判断文を解説し、演習を行う。

所要時間は、プリテスト、ポストテストを入れて2時間である。なお、例文コースと解説コースは交互に開催した。

収集データ分析方法

研究調査事項1に関してはプリテストにおける正答数を用いて評価した。研究調査事項2に関しては、プリテスト、ポストテストを直接確率検定（Fisher's exact test）で検定した。研究調査事項3に関しては、例文コースのポストテストと解説コースのポストテストの結果を直接確率検定で検定した。

更にポストテストの結果が1か月後も保持されるかどうかを検討するため、プリテストと保持テスト、ポストテストと保持テストについても直接確率検定で検定した。

結果

研究調査事項1に関し、中国人ビジネス日本語話者の「は」と「が」の、講義前（プリテスト）における正答率を用法別に表3に示す。

表3. 「は」と「が」の用法別正答率（講義前）

構文	番号	用法	問題数 (注1)	正答数	不正答数	正答率 (%)	
単文	1	主題の「は」	304	234	70	76.97%	
	2	判断の「は」	304	248	56	81.58%	
	3	対比の「は」	304	239	65	78.62%	
	4	目的格をとる「は」	304	210	94	69.08%	
	5	現象の「が」	304	229	75	75.33%	
	6	排他の「が」	304	192	112	63.16%	
	7	可能・感覚・所有の「が」	304	266	38	87.50%	
重文	8	対比	304	135	169	44.41%	
	9	並立	304	140	164	46.05%	
	10	弱・並立節の「は」	304	187	117	61.51%	
複文 (注2)	11	弱・並立節の「が」	304	186	118	61.18%	
	12	強・連用節の「が」	304	204	100	67.11%	
	13	強・連体節の「が」	304	270	34	88.82%	
	14	強・名詞節の「が」	304	242	62	79.61%	
	15	弱・引用節の「は」	304	227	77	74.67%	
	16	弱・引用節の「が」	304	210	94	69.08%	
	特殊	17	はが文の「は、が」	304	270	34	88.82%
		18	転移判断文の「が」	304	59	245	19.41%
合計および総平均			5,472	3,748	1,724	68.49%	

注1. ひとつの用法につき2問、被験者152名で、各用法304問である。

注2. 複文の弱、強とは従属性の弱い従属節、強い従属節を指す。

研究調査事項1の「は」と「が」の正答率は平均68.49%であった。正答率の低い順では、転移判断文が19.41%、重文の対比が44.41%、重文の並立が46.05%となった。正答率の高い順では、はが文が88.82%、複文の連体節も同位で88.82%、単文の可能・感覚・所有の「が」が87.50%となった。

研究調査事項2に関して、構文別の明示的な指導の効果の有無を表4に示す。

表4. 構文別の明示的な指導の効果

構文	総数	講義前			講義後				
		正答数	不正 答数	正答率 (%)	正答数	不正 答数	正答率 (%)	正答 率差	検定 (注2)
単文 (注1)	2,128	1,618	510	76.03%	1,591	537	74.77%	-1.27%	ns
重文	608	275	333	45.23%	508	100	83.55%	+38.32%	*
複文	2,128	1,526	602	71.71%	1,673	455	78.62%	+6.91%	*
はが文	304	270	34	88.82%	281	23	92.43%	+3.61%	ns
転移判 断文	304	59	245	19.41%	266	38	87.50%	+68.09%	*
総合	5,472	3,748	1,724	68.49%	4,319	1,153	78.93%	+10.44%	*

注1. 「例文の提示」コースと「機能の解説」コースの合算である。

注2. 直接確率検定 (Fisher's exact test) による両側検定 ($p < .05$) ; ns: not significant; *: significant.

全体では講義前の正答率68.49%が、講義後は78.93%に有意に向上した(直接確率検定の両側検定、 $p < .05$ 、以下同じ)。単文では講義後の正答率が74.77%であったが、講義前との差、-1.27%は有意ではなかった。重文では講義後の正答率が83.55%と、+38.32%と向上し、差は有意であった。複文では講義後の正答率が78.62%で、差の+6.91%は有意であった。はが文では講義後の正答率が92.43%と向上したが、差の+3.61%は有意ではなかった。転移判断文では講義後の正答率が87.50%と向上し、差の+68.09%は有意であった。

研究調査事項3に関して、単文における例文コースおよび解説コースによる明示的な指導の結果を表5に示す。

表5. 単文: 例文コースおよび解説コースによる指導効果の差

コース	総数	講義前			講義後				
		正答数	不正 答数	正答率 (%)	正答数	不正 答数	正答率 (%)	正答 率差	検定 (注)
例文	1,064	820	244	77.07%	821	243	77.16%	+0.09%	ns
解説	1,064	798	266	75.00%	770	294	72.37%	-2.63%	ns

注. 直接確率検定 (Fisher's exact test) による両側検定 ($p < .05$); ns: not significant; *: significant.

単文の指導の効果に関しては、例文コースと解説コースとも、有意な正答率の向上は図れなかった。一方、講義後のふたつのコースの正答率の差は直接確率検定で有意と判定された ($p < .05$)。例文コースの被験者の正答率のほうが有意に高いということになる。

考察

研究調査事項1に関しては、全用法の平均で68.49%の正答率であった。もっとも正答率の低かったのは転移判断文で、ついで重文の対比、重文の並立の順となった。特に転移判断文の正答率は極端に低い。「が」を取るべきところを「は」としているわけだが、これは俵山 (2007) や野田 (2001) が指摘している、日本語学習者は分からないときは「は」を使う傾向がある、が現象として現れたと思われる。転移判断文と重文の正答率が低いという結果は孟 (2004) の報告と一致する。孟の研究も本研究も中国人日本語学習者もしくは使用者に関してなので、この結果は、中国人学習者共通の傾向である可能性がある。

一方、市川 (1989) が指摘している、複文での従属節における誤用が多いという問題に関して、正答率をみると従属度の強い従属節である連用節では67.11%、連体節では88.82%、名詞節では79.61%とばらつきが出た。連体節の正答率は「はが文」と同位で一番高く、連用節が一番低い。結果は花田 (1998) の指摘と一致する。従属度の強い従属節での「が」の用法の指導においては、連用節に焦点を当てる必要がある可能性がある。

複文でも、従属度の弱い従属節である並立節の正答率は平均61.35%と複文関係の用法では一番低かった。従属度の弱い従属節では、単文での「は」と「が」の用法がそれぞれの節に適用されるので、課題は単文での「は」と「が」の用法の問題に戻るようになる。

単文では排他の「が」が正答率63.16%と用法全体の正答率に比べて低く、先行研究を裏付ける結果となった。目的格をとる「を」の代わりに「は」(正答率69.08%)も、単文の用法の中では正答率が低かった。一方、先行研究で難しいという報告もあった現象文の「が」(正答率75.33%、以下同じ)、主題の「は」(76.97%)、対比の「は」(78.62%)については用法全体の正答率を上回った。

正答率の高かった用法をみると、はが文と複文の連体節(前述)が88.82%、単文の可能・感覚・所有表現での「が」が87.50%となり、結果は複文の連体節を除き、先行研究の報告と一致した。「○○ができます」は初級の文型として提示されているので、理解度は高いのかもしれない。ついで正答率が高かったのは単文の判断文(81.58%)だった。はが文と判断文の正答率が高いという結果は、孟(2004)と一致しており、これまた中国人学習者の傾向と言えるのではないだろうか。

「は」と「が」の比較では「は」のほうが易しいという先行研究の指摘を検討してみたい。複文や、転移判断文においては「が」を使わなければならない用法があり、単純に「は」と「が」の正答率を比較するのは意味がないと考えられる。よって、単文と重文においてのみ検討する。表3から計算すると、単文での「は」の正答率は76.56%、「が」は75.33%であり、両者を直接確率計算法で比較すると差は有意ではない($p < .05$, 両側検定)。また、重文での比較では、「は」(対比)が44.41%、「が」(並立)が46.05%で、これまた直接確率計算法で差は有意ではなかった($p < .05$, 両側検定)。結論として、「は」は「が」より正答率が高いという先行研究の指摘は確認できなかった。

研究調査事項2を検討してみたい。表4で示すように、重文、複文、転移判断文においては講義後に有意な正答率の向上がみられた。特に講義前に正答率の低かった重文と転移判断文においては正答率がそれぞれ+38.32%、+68.09%と大幅に向上している。被験者が日本語を学習する過程で、これらの用法に関して十分な指導を受けていなかったこと、明示的な指導が効果を発揮したと推察される。

複文における正答率の変化を表6に示す。従属度の強い従属節においては有意な正答率の向上があった。一方、並立節と引用節のように、「が」と「は」の両方の可能性がある従属度の弱い文においては正答率の向上はみられなかった。少なくとも強い従属度の従属節に関しては明示的な指導により理解度が向上すると言える。

一方、単文とはが文においては有意な正答率の向上がみられなかった。単文に関しては研究調査事項3で検討したい。はが文に関しては講義前の正答率が88.82%であり、向上の余地は他の用法に比べてあまりなかったと言えるかもしれない。

表6. 複文における明示的指導の効果

	項目数	講義前			講義後			検定(注)
		正解	不正解	正解%	正解	不正解	正解%	
連用	304	204	100	67.11%	260	44	85.53%	
連体	304	270	34	88.82%	294	10	96.71%	
名詞	304	242	62	79.61%	282	22	92.76%	
従属節	912	716	196	78.51%	836	76	91.67%	*
並立・が	304	186	118	61.18%	212	92	69.74%	
並立・は	304	187	117	61.51%	189	115	62.17%	
並立節	608	373	235	61.35%	401	207	65.95%	ns
引用・が	304	210	94	69.08%	264	40	86.84%	
引用・は	304	227	77	74.67%	172	132	56.58%	
引用節	608	437	171	71.88%	436	172	71.71%	ns
複文合計	2,128	1,526	602	71.71%	1,673	455	78.62%	*

注. 直接確率検定 (Fisher's exact test) による両側検定 ($p < .05$); ns: not significant; *: significant.

本研究では指導効果の持続度を測定するため保持テスト(1か月後テスト、実際には31日後から40日後)を実施している。その結果を表7に示す。

表7. 構文別の明示的な指導の効果(1か月後)

構文	総数	講義前			1か月後				検定 (注2)
		正答数	不正答 数	正答率 (%)	正答数	不正答 数	正答率 (%)	正答率 差	
単文 (注1)	2,128	1,618	510	76.03%	1,682	446	79.04%	+3.01%	*
重文	608	275	333	45.23%	474	134	77.96%	+32.73%	*
複文	2,128	1,526	602	71.71%	1,649	479	77.49%	+5.78%	*
はが文	304	270	34	88.82%	279	25	91.78%	+2.96%	ns
転移判 断文	304	59	245	19.41%	163	141	53.62%	+34.21%	*

注1. 「例文の提示」コースと「機能の解説」コースの合算である。

注2. 直接確率検定 (Fisher's exact test) による両側検定 ($p < .05$); ns: not significant; *: significant.

はが文を除いて、正答率の向上はいずれも直接確率検定で有意となっており、明示的な指導の効果は1か月後も持続すると結論付けられた ($p < .05$, 両側検定)。ただ、講義後と比較すると、重文では正答率が83.55%から77.96%に、転移判断文では87.50%から53.62%へと有意に低下しており(直接確率検定、 $p < .05$)、定着化にはもっと時間をかける必要があると思われる。

研究調査事項3を検討してみたい。表5にあるように、講義後の正答率は例文コースも解説コースも有意な向上はみられなかった。しかし、例文コースのほうが解説コースよりも正答率が有意に高かった。「は」と「が」の用法についての文法機能の解説は、被験者の持つ文法知識に混乱を与えた可能性がある。結論としては、「例文の提示」または「機能の解説」のどちらが優れているかに関しては今回の研究では判断できなかった。単文における「は」と「が」の正答率向上のためには講義の内容を改善する必要があると言える。

まとめとして、「は」と「が」の正答率を用法別に分析すると千差万別であり、構文によって大きく異なることが分かった。したがって孟(2004)の提唱する構文別に指導する方法は意味があると結論付けられるのではないか。更には各構文においても理解度の強弱があるので、本研究で使用したような、主たる用法を網羅したテストを事前に実施し、その結果を踏まえて指導すると効果的ではないかと思われる。

おわりに

総括すると、孟(2004)の提唱する、「は」と「が」に関しては構文ごとに指導すべきという主張は有効であると判断できるだろう。また、本研究の中国人日本語話者においては転移判断文と重文での「は」と「が」の用法に課題があり、明示的な指導で正答率(理解度)を向上させることができることが確認できた。この結果は孟(2004)と一致し、孟が指摘しているようにその要因は日本語を学習する過程で明示的な指導を受けなかったことに起因するもので、用法の難度では無いように思える。短期間の指導で正答率が大幅に向上したことはそれを裏付けていると言える。一方で、単文では理解度の向上が図れず、また例文による指導法と文法機能の説明による指導法の効果の差は確認できなかった。今後の課題としたい。

なお本研究においては、問題文は「は」と「が」の二者択一であり、偶然に左右される可能性があるので、正答率の絶対値に関しては、信頼度は高くないことを明記したい。

執筆者

松澤隆志 2009年より中国・深圳の企業で中国人社員に日本語を教える。2012年より浙江師範大学で勤務。2014年契約満了となり帰国。主な研究分野は外国人の実践的な日本語使用における問題など。
<matsuzaw@siren.ocn.ne.jp>

引用文献

- 市川保子. (1989). 「取り立て助詞「ハ」の誤用—談話レベルの誤用を中心に—」. 『日本語教育』, 67, 159-172.
- 市川保子・本間倫子. (1990). 「取り立て助詞「ハ」導入のための一試案—イラストと漫画で「ハ」を教える—」. 『日本語教育』, 70, 90-106.
- 今村一子. (2002). 「「は」VS「が」と日本語教育」. 『信州大学留学生センター紀要』, 3, 45-59.
- 坂本正. (1998). 「助詞「は」と「が」の習得について—文法性判断テストを通して—」. 『アカデミア文学・語学編』, 491-508. 南山大学.
- 謝福台・金城尚美. (2005). 「日本語学習者の「は」と「が」の使い分けに関する一考察—中国語母語話者と韓国語母語話者の場合—」. 『琉球大学留学生センター紀要』, 2, 41-59.
- 徐一琳. (2005). 「中国語母語話者に対する「は」と「が」の指導法—主題・主格の日中対照研究による—」. 『早稲田大学日本語教育研究』, 7, 81-93.

- 焦宗艶. (2011). 「中国語母語話者の日本語習得における「は」と「が」の誤用の傾向と原因についての考察—中国国内の日本語学習者を中心に—」. 『日本語研究』, 31, 33-48.
- 田村泰男. (1994). 「日本語上級者の「が」「は」の使い分けに関する理解度について—単文中で主語をマークする場合—」. 『広島大学留学生センター紀要』, 4, 41-48.
- 俵山雄司. (2007). 「談話終結部における助詞「は」と「が」の選択—日本語母語話者と学習者の語りの分析から—」. 『筑波大学地域研究』, 28, 51-65.
- 野田尚史. (2001). 「文法の理解と運用」. 『日本学習者の文法習得』. 大修館書店.
- 花田敦子. (1998). 「学習者の「は」と「が」の使い分けの意識—キーワードによる分析—」. 『九州大学留学生センター紀要』, 9, 65-84.
- 村田水恵. (2007). 『入門日本語の文法』. アルク.
- 孟玲秀. (2004). 「日本語教育における「は」と「が」の教授法—中国人学習者に対する日本語教育の場合—」. 大阪教育大学大学院修士論文.

付録 問題文例

「は」と「が」テスト A

名前 _____ 社員番号 _____
(授業前 授業後 1ヵ月後)

次の文章で、「は」または「が」の正しいほうに○(まる)をしてください。全部で36問あります。

- 「私は絶対正しい。」「そういう考え方(が)は問題なのです。」
- バラ(が)は咲きましたが、あまりにおいはいしませんね。
- 「これはみかんですか。」「それ(が)はポンカンと言います。」
- どうしたら温暖化を防げるのか(が)は課題です。
- 今年、地震(が)はあったのは、チリです。
- 北海道に雪(が)は降ったとニュースで言っています。
- 彼女をリーダーにしたの(が)は成功の原因だった。
- 通信販売で、もうお金(が)は払ったけれど、品物が来ない。
- 深圳(が)はアパート代(が)は高い。
- 明日(が)は休日だが、僕は仕事だ。
- お返事(が)は遅れて申し訳ありません。
- 「あれ、どれが君のだっけ?」「これ(が)は僕のだよ。」
- 先生(が)はいつ深圳に来たのですか。
- 年齢は、兄(が)は20歳で、弟(が)は17歳です。
- 人間(が)は孤独な生き物だと誰かが言った。
- りんご(が)は1個30円、なし(が)は1個20円です。
- 友達(が)は帰って、私は部屋にひとりになった。
- 勉強するほど分らないところ(が)は出てきます。
- 月(が)は衛星である。
- 佐藤さん(が)は髪(が)はショートカットです。
- ここから波の音(が)は聞こえます。
- ピサの斜塔(が)は倒れることはありません。
- 犬(が)は動物である。
- 交通費(が)は申請しました。
- 電車(が)は来た。
- 塀(が)は倒れて、怪我人が出た。(塀:柵垣)
- 日本語(が)は話せます。
- 「会社の旅行、どうする?」「私(が)は行きます。」
- 学生時代、私(が)は家から大学に通っていた。
- 私(が)は作った料理と一緒に食べましょう。
- 有名な研究所(が)は発表した資料を読みました。
- 妻は食べるの(が)は好きですが、作るの(が)は嫌いです。
- 太陽(が)は常に核融合していると聞きました。
- あの本(が)は人に貸しました。
- あのきれいなひと(が)は男だというのは本当ですか。
- 正月、友達(が)は田舎に帰りますが、私(が)は帰りません。

以上